

キリスト教教育が大切にしているもの

西原廉太 (立教大学総長・キリスト教学校教育同盟理事長)

最近、キリスト教学校教育同盟に加盟している102学校法人それぞれが大切にしている「建学の精神」を精査する機会がありました。その結果、キリスト教学校の「建学の精神」には、共通する主軸があるということが分かりました。それは、<普遍的なる真理を探究し、この世界・社会・隣人のために奉仕する者たちを生み、育てる>という使命です。おそらくあらゆる学校の目的は「真理の探究」にあることは間違いありません。しかしながら、その中でもとりわけキリスト教学校は、「何のために」真理を求め学ぶのかという、いわば神から与えられた究極的なミッション、すなわち、<この世界・社会・隣人のために仕える者となれ>という使命を原理としているのだ、と言えるでしょう。

近代的大学の起源は、12・13世紀に誕生したパリ大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学などのカレッジに^{さかのぼ}遡ります。これらは、修道院から派生したもので、初期大学から存在した主要学部は、「神学部」「医学部」「法学部」でした。神学部を卒業すれば「司祭」となります。それは人々の「精神的・霊的痛み」に寄り添う仕事です。医学部を卒業すると「医者」になります。それは人々の「身体的・肉体的痛み」を癒す働きを担います。法学部を卒業すると「法律家」になります。それは人々の「社会的痛み」を解決しようとする職務です。実は、これらの「痛み」に寄り添う働きこそが、「職業」でした。「職業」を英語では、“vocation”と言いますが、それはラテン語の VOCARE (召命=聖職者という使命に神に召されること)に由来します。つまり、人々の痛みに寄り添い、癒す働き人を生み、育てるためにカレッジは創られたのです。ここにこそ、私たちが大切にすべきキリスト教教育の原点があることは間違いありません。

もう一つの重要なキリスト教学校のミッションは、「多様な一人ひとりの存在を大切にすること」にほかなりません。私が属する聖公会という教会が大切にしている教会論は、「風船型」ではなく「鳥の巣型」であると言われます。教会とは、同心円的に膨張し、しかし何らかの原因によって穴があけば萎んだり、破裂してばらばらになってしまうような「風

船」ではない。そうではなく、むしろ、「鳥の巣」のようなものである、という理解です。「鳥の巣」は異なる無数の小枝で作られており、しかしながら隙間があっても針で刺しても、その巣は壊れることなく、その中で、卵、そして雛、<いのち>を育てるといふ神の目的を担い続けるのです。私たちの学び舎や交わりも「鳥の巣」でありたいと願います。私たちの子どもたち一人ひとりが、多様な「枝」なのです。

私たちが子どもたちに伝えたいことは、「私たちは、みなさん一人ひとりを、かけがえのない存在として、大切にしています。そして、みなさんもまた、このような愛をもって、他者とつながり、その尊厳を限りなく尊ぶ者となってもらいたいのです」という願いに尽きるのではないのでしょうか。そのことを私たちが伝えられるのならば、それで十分に、私たちはキリスト教育を実践できていると言えるのだと確信しています。

東京YWCAはキリスト教を基盤として、「いのちを尊び、平和を願い求める青少年を育てる」「個人の尊厳を重んじ、支え合う社会を目指す」ことをミッションとされています。まさしく、東京YWCAのみなさんの一つひとつの働きが、そのまま「キリスト教教育」が大切にしている理念の実践そのものでもあるのです。東京YWCAという交わりが、神の愛の糸で紡がれ、その中で豊かに<いのち>が育まれる「鳥の巣」であることに、ぜひとも誇りをもっていただければと願います。